

月刊自治研 5 2026

創ろう! 市民自治のゆたかな社会
vol.68 no.800

800号記念

見つけよう、わたしの自治研



宮崎県小林市経済建設部畜産課
寛 彩華さん

〈地域を支える顔〉

「ふくい自治研」
開催要項は
裏表紙より
ご覧ください

月刊自治研

発行所 発行元 ● 株式会社自治研
〒251-8511 東京都千代田区千代田1-10-2-0085
電話 ● 03-3263-0274

定価 ● 838円(本体762円+税10%)
自治研中央推進委員会

2026
ふくい自治研

開催要項

日程 ● **【全体会】** 2026年10月2日(金)
【分科会等】 2026年10月3日(土)

会場 ● 福井県福井市フェニックスプラザ「エルピス大ホール」他

メインテーマ ● 発掘・発見、わたしの自治研
—好きなことのその先に—

1日目 全体集会プログラム

日時◎2026年10月2日(金)10:00～17:00

会場◎福井県福井市 フェニックスプラザ「エルピス大ホール」

10:00—12:00 開会あいさつ／自治研賞発表・表彰・講評／基調提起

13:00—16:30

○オープニング

福井商業高校チアリーダー部「JETS」もしくはOG「Grace JETS」

○メインプログラム

自治研セッション「発掘・発見、わたしの自治研—好きなことのその先に—」

1957年から続けられてきた自治労の自治研活動。職場や地域における挑戦的な実践の数々は、豊かな社会の実現に寄与してきました。

急速に進行する人口減少や価値観の変容という社会状況の中で、自治体現場の試行錯誤が続けられている一方で、「自治研」の存在感は現場から薄れつつあります。

ふくい自治研では、長年にわたり福井県本部が培ってきた「応援したくなる」「楽しさから広がる」参加型の自治研活動を織り交ぜ、「わたし」が起点となる自治研を参加者とともに探ります。

「自治研はもういない？」——その問いへの答えを、みなさんとともに探る「探索型プログラム」です。

モデレーター



波多野 翼さん・前衆議院議員

衆議院議員を経験し、怖いものがなくなったからこそ、自治研のタブーに切り込んでいきます。言っちゃいけないような雰囲気やキラキラしていない現場との違和感にも向き合い、実践につながる問いを皆さんと共に深める時間になりたいと思います。



丹羽野真也さん・(株)Be One 代表取締役

変化は、誰か一人の小さな気づきから始まります。それを仲間が受け止め、応援し、広げていくことで大きな力になる。『わたしの自治研』を『みんなの自治研』へ。一緒に考えましょう。

スピーカー◎全国の「わたしの自治研」が多数登壇

MC◎森 友紀(自治労本部政策局長)／佐藤茂雄(自治研中央推進委員 山形県本部)

16:30—17:00 まとめ・閉会

2日目 分科会プログラム

日時◎ 2026年10月3日(土) 9:00～16:00
(分科会によって時間帯は異なります)

会場◎ 福井駅周辺にて分散開催 (MAP: 20ページ参照)
第6分科会のみ敦賀にて開催
(会場は参加申し込み締め切り後にご案内いたします)

分科会一覧

第1分科会 **田んぼ発の政策提言** **定員 80人**
誰が農業を支えるのか、もう一度考えてみた。 (先着順)

第2分科会 **地域資源の創造り方**

第3分科会 **大規模災害と公務員**

第4分科会 **分断の時代をどう支えるか**
自治体の現場から考える外国人住民との共生社会

第5分科会 **人口減少社会における**
公務職場のあり方と働き方

第6分科会 **「平和」** ～あたりまえの日常は、
平和な社会で あり続けることから～ **敦賀開催**
現地集合・現地解散
定員 50人(先着順)

エキシビジョン **自治研るつぼを体感し、実践につなげる** **【会場】**
—ふくい自治研トリビウム— **ハビリンホール**

福井
子ども分科会 **開催県本部・特別分科会**
子どもまんなか社会の実現に向けて
～行政と市民がお互いリスペクトし合う関係性をめざして～
(勝山・大野コース)

エクスカージョン **「恐竜王国ふくいの秘密を探れ!」恐竜博物館ツアー** **定員各 80人**
(丹南コース) (先着順)
「オーガニック都市・越前&コウノトリの里を訪ねて」

第1分科会 **田んぼ発の政策提言** **定員 80人**
誰が農業を支えるのか、もう一度考えてみた。 (先着順)

近年、とくに地方においては、産業や生業(なりわい)として農業の持続可能性について議論の深化と政策転換の必要性が高まっています。

他方、さまざまな場面で個別化・専門化が推し進められた現代において、相手のありのままの姿や存在価値を認め敬意を払い、「多様性」を見つめ直し相互理解を深めようという社会の動きもあります。また、地域で生きていくことは、一つの職業や場所だけではなく多様な「働き方」をすることにつながっています。

本分科会では、開催地である福井県内の取り組み事例を通じて、多様・多彩な働き方、いわば「ダイバースジョブ」の理解を深め、グループワークを通じて政策提言をめざします。

分科会登壇者(一部)



小葉松真里さん・フリーランス農家

北海道帯広市出身。新聞社、まちづくり会社、地域おこし協力隊として働くなかで、農業に対する価値観が大きく変化したことをきっかけに会社員を辞め、農業の道へ進む。2019年からは土地や拠点を持たない「フリーランス農家」として、日本各地の農場を巡りながら活動。現場で感じたリアルをもとに、生産者と消費者をつなぐ取り組みや、農業に関わる人を増やすための企画・発信を行っている。2024年に書籍「フリーランス農家という働き方」を出版。



齋藤峰雄さん・有限会社あわら農楽ファーム 執行役員

農業を通じて障がいを持つ人たちに働く場を提供するとともに、後継者不足となっている地域農業の担い手として地域に貢献することを目的に設立された福井県あわら市の農業法人で活動。「農福連携×スマート農業」と「農福連携×自然環境に優しい農業」など、さまざまな観点から農業に取り組んでいる。

タイムスケジュール

〈午前〉9:00～11:40
●事例報告1「フリーランス農家って楽しい(仮題)」小葉松真里さん(フリーランス農家)
・ワークショップ①
●事例報告2「農業の持続可能性を広げる農福連携(仮題)」
齋藤峰雄さん(有限会社あわら農楽ファーム 執行役員)
〈午後〉12:40～14:30
・ワークショップ②/グループ発表・講評/先行事例報告



第1分科会の特徴

自分の地元では何ができるかを考えるきっかけをめざす分科会です。飽きずに参加できるコンパクトな企画とエキシビジョンにも参加しやすい時間設定としています。(担当:北海道・東北地連)

コンテンツをつくる 地域資源の創造り方

これまでのコンテンツツーリズムは、アニメやドラマの聖地巡礼やゆかりの地など、ファンの間で自然発生的に生まれた地域資源を受動的に活用する形が常でした。しかし、近年は行政側から能動的にコンテンツを地域資源化していこうという動きがみられはじめています。そういった先進事例を基に、どうすればコンテンツを地域資源として活かすことができるか、あるいは地域資源を生み出すことができるかについて、専門的知見に基づき掘り下げます。

ここには、これからの「^{コンテンツをつくる}地域資源の創造り方」の設計図があります。

分科会登壇者(一部)



岡本 健さん・近畿大学総合社会学部総合社会学科教授/
国際日本文化研究センター客員教授

専門は観光社会学、メディア・コンテンツ研究。VTuber「ゾンビ先生」として配信活動を行っている。著作に『巡礼ビジネス』(KADOKAWA)、『ゾンビ学』(人文書院)、『VTuber学』(岩波書店)などがある。



荻野健一さん・デジタルハリウッド大学大学院デジタルコンテンツ研究科名誉教授/
京都芸術大学芸術学部キャラクターデザイン学科教授

専門はコンテンツプロデュース、コミュニケーションデザイン、感性情報学。文化知層探求者。全国各地の自治体や企業と連携した聖地創生プロジェクトを手掛けている。

タイムスケジュール

〈午前〉9:00～12:00

- 講演「^{コンテンツをつくる}コンテンツツーリズムが創造るもの ―「好き」が駆動するクリエイティブな観光のあり方(仮)」 岡本健さん(近畿大学総合社会学部総合社会学科准教授)
- 講演「「地域の新・古典」を創る―地域資源の隠れたポテンシャル(仮)」 荻野健一さん(デジタルハリウッド大学大学院デジタルコンテンツ研究科名誉教授)

〈午後〉13:00～16:00

- ・各自治体からの報告 前橋市「前橋ウィッチーズ」/福井市「千歳くんはラムネ瓶のなか」
- ・パネルディスカッション



第2分科会の特徴

この分科会では、先進事例×最先端の知見で、あなたの^{コンテンツ}地域資源の概念を塗り替えます。(担当:関東甲地連)

大規模災害と公務員

この分科会では、「令和6年能登半島地震」の被災自治体に勤務する職員の具体的な体験をお聞きしながら、災害時における公務員の役割と責任を再確認するとともに、職員の安全確保や健康管理のあり方について議論します。さらに、平時からの備えや人材育成、受援体制の構築など、持続可能な災害対応力の強化、また職員の生活者としての課題(家事や子育て、介護など)について、多角的に検討します。

参加者同士の意見交換を通じて、各自治体における課題を明確化し、実践的な改善策や組合としての関わり方を導き出すことで、今後の災害対応力の向上と働きやすい職場環境の実現をめざします。

分科会登壇者(一部)



道下康郎さん・能登町職員組合前執行委員長

1999年能登町役場入庁(旧内浦町役場)。自治大学校令和3年度第2部課程第194期卒業。現在は秘書室長として職員人事・秘書業務を統括。



福富真子さん・高知県自治研究センター理事/高知県後期高齢者広域連合事業課長

高知県出身。1999年、高知市役所入庁。庁内や自治労高知県本部女性部において、被災後の課題や不安を気軽に話し合う活動を展開。また、「こうち減災女子部」として地域の防災士とともに、女性の強みを生かした防災・減災活動を実施している。

タイムスケジュール

〈午前〉9:00～12:00

- 講演「被災時の体験から」 道下康郎さん(能登町職員組合前執行委員長)
- パネルディスカッション(1部)
パネラー●道下康郎さん(能登町職員)、藤田陽子さん(七尾市職員)
氷見市職員(予定)、糸崎弥央さん(自治労石川県本部書記長)

〈午後〉13:00～16:00

- ケーススタディー ファシリテーター●福富真子さん(高知市職員)
- パネルディスカッション(2部)
会場からの意見・質問を交えた全登壇者によるまとめ



第3分科会の特徴

被災体験をふまえ、公務員の役割と責任、生活課題を多角的に検討し、災害対応力向上と改善策を考える分科会です。

(担当:北信・東海地連)

分断の時代をどう支えるか 自治体の現場から考える外国人住民との共生社会

日本で暮らす外国人が増えている今、行政がどのように関わっていくべきかが大きな課題となっています。共生に向け住民と行政が協働して取り組む地域がある反面、外国人への偏見に基づく差別や、SNSを通じたヘイトスピーチといった人権侵害も深刻化しています。

この分科会では、「人権と多様性」を軸に、偏見と差別の背景をひも解き、自らの意識に向き合いながら、自治体職員・組合員として差別を助長させないためのあり方を議論します。あわせて、先行事例や当事者の視点から学び、今後の地域社会のあり方を模索します。

分科会登壇者(一部)



金子匡良さん・法政大学法学部教授

1969年生まれ。東京都出身。法政大学社会科学部研究科法律学専攻博士後期課程修了。博士(法学)。神奈川大学法学部准教授、同教授等を経て、2018年より現職。専門は憲法、人権法、人権政策。



川口サマンサさん・合同会社 ka-sa(カサ)代表/元鯖江市地域おこし協力隊

カナダ出身。2011年に来日後、国連の友 Asia-Pacific での活動や鯖江市地域おこし協力隊を経て、2024年に合同会社 ka-sa を設立。外国人視点を活かし、デザイン・企画・多言語対応などを通じて観光PRや地域の魅力発信に取り組んでいる。

タイムスケジュール

<p>〈午前〉 9:30 ~ 11:40</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 講演「差別や排外主義が生まれる背景 ～外国人住民への差別を助長させない地域社会をつくるには」 金子匡良さん(法政大学法学部教授)
<p>〈午後〉 12:40 ~ 15:50</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 講演「カナダから鯖江市へ移住して感じてきたこと」 川口サマンサさん(合同会社 ka-sa(カサ)代表/元鯖江市地域おこし協力隊) ・ 講師などによる「人権が守られ多様性のある地域社会づくり」にむけたトークセッション ・ 全国の取り組み事例報告

※プログラムの内容は前後することがあります。



第4分科会の特徴

「わたし」を出発点にして、職場や地域における外国人との関わり方を考える機会となるような分科会です。

(担当：近畿地連)

人口減少社会における 公務職場のあり方と働き方

人口減少社会における行政課題、住民との協働、公務職場のあり方(縦割り行政等の業務改革、AI・DX、兼業・副業など)、人材確保・早期退職防止(仕事のやりがい、自治体の魅力や地元愛の醸成)について、講演・事例報告・ワークショップを通じて考察を深めます。自治体職員を取り巻く現状と考え方を共有し、これからの働き方について考えます。

参加者の皆さんには、今後の職場のあり方を再考し、「やらされ」の仕事から「自分事」にする働き方に変化させるための視点や考え方などを持ち帰っていただきます。

分科会登壇者(一部)



嶋田暁文さん・九州大学大学院法学研究院教授

1973年島根県安来市生まれ。博士(政治学)。地方自治総合研究所非常任研究員などを経て現職。専門は、行政学、地方自治論、公共政策論。自治労の各種集会等で講演している。



丹羽野真也さん・(株) Be One 代表取締役

1986年島根県松江市生まれ。松江市役所に入所後、松江市職員ユニオンの書記長を務める。2024年3月末に退職し(株) Be One を設立。自治体や労働組合向けにゲーム型研修やワークショップなどの研修を実施している。

タイムスケジュール

<p>〈午前〉 9:00 ~ 12:00</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 講演「人口減少社会の中での公務職場及び職員のあり方を考える(仮題)」 登壇者：嶋田暁文さん(九州大学大学院法学研究院教授) ● レポート報告 *提出されたレポートから2~3本の報告を受ける
<p>〈午後〉 13:00 ~ 16:00</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ワークショップ●「自治体職員のジョブクラフティング ~仕事の捉え直しから始める働き方改革(仮題)」 ファシリテーター●丹羽野真也さん((株) Be One 代表取締役)

第5分科会の特徴

講演によるインプットをもとに、ワークショップで一人ひとりが自分の頭で考えたことをアウトプットしながら、これからの探る分科会です。「働き方を見直したい方」「新たな見方や考え方を養いたい方」の積極的な参加を期待しています。

(担当：中国・四国地連)



「平和」～あたりまえの日常は、平和な社会であり続けることから～

会場●敦賀市内(敦賀駅から貸切バスにて移動) 人道の港「敦賀ムゼウム」他
 参加費●3,500円(貸切バス、入館料代、昼食代込み)
 現地集合、現地解散、定員50人(先着順)

80年以上、守り続けてきた日本の平和。日本は過去の戦争で、日常生活の尊さを学んできた。だからこそ「反戦平和」の取り組みを大切に守り続けてきた。

敦賀の地には、1920年代にポーランド孤児、1940年代には「命のビザ」を携えたユダヤ難民が上陸し、地域の人びとが分け隔てなく手を差し伸べた歴史がある。敦賀の人びとの様子を後世に伝えている「人道の港・敦賀ムゼウム資料館」で、「平和とは?」「人道とは?」を共に考え、語り合う機会としたい。

国際情勢は、厳しさを増し、日々尊い命が失われている。こうした現実に向き合うとき、日本は「戦前」に戻ることは絶対に許されない。私たち自治労は、これからも「反戦平和」の取り組みの先頭に立ち、平和のバトンを次世代へ引き継いでいくことを希求したい。

分科会登壇者(一部)



河上 暁弘さん・広島市立大学広島平和研究所教授／
 広島市立大学大学院平和学研究科平和学専攻
 富山県富山市出身。中央大学法学部政治学科卒業、専修大学大学院法学研究科博士後期課程修了。博士(法学)。2023年4月より現職。専攻は憲法学。主著として『平和と市民自治の憲法理論』(敬文堂、2012年)等。

タイムスケジュール

9:15 敦賀駅集合 9:20 貸切バスにて「敦賀ムゼウム」へ移動 <午前> 9:30～12:00 ・人道の港「敦賀ムゼウム」資料館見学 ・報告「平和を追い求めていくこと」高校生1万人署名活動家 ・報告「敦賀市職の取り組み」敦賀市職
<午後> 13:00～16:00 ●講演「地方自治にとっての平和の必要性・重要性(仮題)」 河上暁弘さん(広島市立大学広島平和研究所教授) ●パネルディスカッション「平和をつむぐ」 コーディネーター●自治労本部 山崎幸治 副中央執行委員長 パネラー●高校生1万人署名活動家、敦賀市職、他



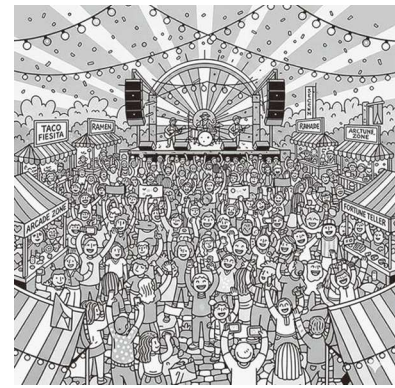
第6分科会の特徴
 ポーランド孤児・ユダヤ難民が上陸した唯一の港・敦賀で、「人びとのくらしは平和な日常であること!」「平和な社会であり続けるために……」など、自分事として一緒に考えてみませんか? (担当:九州地連)

自治研つぼを体感し、実践につなげる
—ふくい自治研トリビウム—
【会場】ハピリンホール

出会いと交流の場所である自治研「トリビウム(三叉路)」をお祭り状態で体感できるプログラムです。ジャンルを限定することなく、自ら活動したい人・活動者を支えたい人、とりあえず体験してみたい人、いろいろな方がつぎの行動のきっかけになる「何か」を発見できる企画です。

刺激が詰まったステージプログラムのほか、各地の自治研活動に触れられるポスターセッションも実施。聞くだけでなく、報告者としてアウトプットすることもできます。

さらには、参加者の「ニーズ(求めていること)」と「シーズ(提供できること)」をマッチングさせる「自治研ギルド」も設置。自治研集会の開催方法の新たなモデルとして、また、全国集会後の人と活動を繋げていくことに取り組みます。



会場イメージ

【企画内容】

- 会場内 常設コーナー
 自治研ギルド／ポスターセッション
- ステージ企画

「公務員を応援するってどういうこと?」
 加藤年紀(株式会社ホルグ代表取締役)
 「自治研×ゲーミフィケーション紹介」株式会社 BeOne
 「自治研センターの活動紹介」
 「魁! 飛田塾 財政分析は怖くない。一緒にやってみよう!」
 (公財) 地方自治総合研究所



企画・運営チームより

参加者交流をはじめ、展示・出展、ステージ出演など多数用意しています。ハピリンテラスの組合フェスと合わせ、自治研トリビウムを楽しみましょう。(担当:エキシビションチーム(自治研中央推進委員))

【申し込み方法】

エキシビションは分科会と並行して開催します。参加を希望される方は分科会の選択時にエキシビションを選択してください。受付後は入退場自由。分科会の昼休みや終了後に立ち寄ることもできます。

子どもまんなか社会の実現に向けて ～行政と市民がお互いリスペクトし合う関係性をめざして～

自治労福井県本部では、近年、県本部社会福祉評議会メンバーや担当役員を中心に、「子どもフェス」「親と子のリレーションシップほくりく」など、地域の子どもや子育てに関わる市民ネットワークへ参画し、その自律的な取り組みへの支援・協力を継続してきました。

「子ども基本法」の施行以来、県内の複数の自治体で「子どもの権利等の条例」が制定（改正）され、各地で子どもの権利を考える機運が高まっている中、子どもを中心に据えた地域づくりのあり方や、行政と市民がリスペクトし合いながら協働する関係性等について議論したいと考えています。その際に私たちがめざすのは、まさに企画・運営・参加・評価の各段階を含めて、市民の方半分・自治体職員半分で実現するというまさに「自治研」の理想形・未来形です。

長年、積み重ねてきた「市民自治研」の現場の雰囲気を、全国からの参加者と共有し、地域発・自治体発の「子どもまんなか社会」づくりを全国に広げていきましょう。



分科会助言者

喜多明人さん・早稲田大学名誉教授

子どもの権利・教育法を専門とし、子どもの権利条約や条例づくりに関する研究・実践の第一人者。自治体の条例制定支援や市民活動にも幅広く関わり、全国で講演・執筆活動を行っている。

タイムスケジュール

<p><午前> 9:00～12:00 基調講演●「子どもの権利を起点としたまちづくりの展望 ～子どもの声を子ども政策にどう反映させていくべきか～」 講師●喜多明人さん（早稲田大学名誉教授） 行政・団体活動報告 パネルディスカッション●「市民・行政のぶっちゃけトーク」</p>
<p><午前> 13:00～16:00 テーマ別分科会①「子ども条例・権利関係」 ②「行政・市民協働の学び&交流の場（りほく&子どもフェス）」 ③子どもを育む人を育む～支援者支援・協同労働・地域コンソーシアムの実践～ 分科会報告&クロージング</p>



「恐竜王国ふくいの秘密を探れ！」

「オーガニック都市・越前&コウノトリの里を訪ねて」

定員 各80人

(先着順)

参加費 4,500円

(各コース共通)

ふくい自治研2日目は、エクスカーションを2コース用意しています。

福井県内における少子高齢化、人口減少時代における持続可能な地域活性化の特徴的な取り組みを現地に實際足を運んで自分の目で確かめていただくことで全国の皆様に広く発信していきたいと思っています。



一つは、県立恐竜博物館と大野シルバー人材センターの取り組みを見ていただく「勝山・大野コース」です。県立恐竜博物館は、言わずと知れた国内有数の展示規模を誇る世界3大恐竜博物館の

一つであり、昨年7月にリニューアルして体験型としても充実した施設です。恐竜博物館を核とした地域経営戦略を発信していきたいと思っています。大野シルバー人材センターは6年連続独自事業収入総額が全国1位を続けています。高齢者が地域資源を活かし、自主的に地域活性化の担い手として取り組んでいる活動を紹介する中で地域の強みや特色について発信していきたいと思っています。



もう一つは、コウノトリの生息地である越前市白山地区における有機農業の取り組みを見ていただく「丹南コース」です。越前市白山地区は、豊富な水に恵まれ、全国的にも希少な生物多様性の自然環境に富んでおり、「里地里山保全再生モデル」地区に指定されています。そして自然豊かな土地や気候を生かして農薬と化学肥料を用いない有機農業を営み、コメや野菜や果物の栽培を行っています。「しらやま西瓜」などが有名です。地域住民の献身的な取り組みによりコウノトリが生息している秘密や有機農業を核とした地域コミュニティ活動の特徴を学んでいただきたいと思っています。



皆様方のお越しをお待ちしております。

10月3日（土）エクスカーション行程表（予定）

<p>〈勝山・大野コース〉 「恐竜王国ふくいの秘密を探れ！」 恐竜博物館ツアー</p>	<p>〈丹南コース〉 「オーガニック都市・越前&コウノトリの里を訪ねて」</p>
<p>8:30（予定）JR 福井駅東口出発（貸切バス） 〈午前〉県立恐竜博物館内ツアー一ほか 〈午後〉昼食 大野市シルバー人材センター取り組み報告 大野市内散策</p>	<p>8:45（予定）JR 福井駅東口出発（貸切バス） 〈午前〉越前市白山地区内の各所を見学 〈午後〉コウノトリPR館、白山公民館 昼食 越前市の有機農業・エコ観光施策について学習</p>
<p>15:00（予定）JR 福井駅東口到着、解散</p>	<p>15:00（予定）JR 福井駅東口到着、解散</p>

市民と職員が「一致団結」で歩む未来へ 福井市・組合フェスティバルの軌跡と展望

はじめに

福井市職員労働組合（以下、市職労）が主催する「組合フェスティバル」は、2017年の結成70周年記念行事を前身とし、今や福井市の秋を彩る恒例行事として定着しています。日頃の市民の皆さんの理解に感謝を伝え、行政職員が職場の外で市民と直接触れ合う場を作りたい。そんな原点を大切にしながら、私たちは一歩ずつ歩みを進めてきました。

逆境の中の「一致団結」——2018年の記憶

本イベントが本格始動した2018年は、福井市にとって激動の年でした。2月、37年ぶりの記録的な豪雪が街を襲い、その除雪費用による財政危機から、全国的にも異例の「職員給与削減」という厳しい局面に直面したのです。

職場に閉塞感が漂う中、当時の執行部や組合員たちが立ち上がった背景には、「この暗い空気を打破し、直後に控えた福井国体を成功させたい」という、自治体職員としての強い自負がありました。

9月に開催されたフェスティバルでは、豪雪対応で共に汗を流した市民の方から「職員はあんなに頑張ったんだから、給料を下げるのは間違っているよ」と温かい励ましをいただく場面もありました。この経験は、単なる労使交渉の枠を超えた「市民との信頼関係」こそが、私たち職員にとって最大の支えであることを再確認させてくれる大切な機会となりました。

試行錯誤でつなぐ、手作りの自治研活動

2018年以降、このイベントは試行錯誤を繰り返しながら、組織的な「自治研活動」へと進化してきました。現在は執行部や有志のメンバーが中心



となり、「今年は何ができるだろうか」と知恵を絞りながら、手作りでイベントを練り上げています。

コロナ禍という困難な時期にも、「今、自分たちにできることで、少しでも街に元気を届けたい」という一心で議論を重ねました。駅前商店街の皆さんを応援するスタンプラリーや、広い空間を活かした中央公園での開催など、その時々状況に合わせて、「地域に寄り添う形」を仲間と協力して作り続けてきました。

こうした想いは、年を追うごとに具体的な形となっています。パトカーなどの「働く車コーナー」や移動図書館、地元のパフォーマーによるステージ、そして夜空を彩る花火。これらはすべて、組合員が自身の業務経験や自由なアイデアを出し合い、「市民の皆さんに笑顔を届けたい」と話し合いを重ねて実現させてきたものです。こうした泥臭い準備のプロセスそのものが、組合員同士の絆を深め、福井市職労らしい自治研活動の形となっています。

おわりに

本イベントの本質は、準備や運営を通じて、私たち職員が地域課題を自分事として捉える「当事者意識」を育むことにあります。職場の外で市民と同じ目線に立って対話することは、巡り巡って質の高い行政サービスとして還元されていくはず。そんな福井市って良くなったね。そう感じていただける街づくりをめざして、私たちはこれからも「一致団結」の精神で、地域と共に歩み続けていきます。

「ふくい自治研」では、10月2日（全体会終了後～夜）および3日（分科会・エキシビションと併催・終日）に、スペシャルな「組合フェス」を、福井駅前のテラス（屋根付き）で開催します。「ふくいの食」をテーマに、「秋吉（焼き鳥）」、越前おろしそば、厚揚げなど、地元の名物を取りそろえてお待ちしております。各県本部・各単組の団結会用として、席の事前予約も受け付ける予定です。また、豪華特典が当たる抽選券付きの前売りチケットを販売いたします。本企画は能登の復興支援にもつながる取り組みとして実施いたしますので、ぜひ多くの皆様のご来場を心よりお待ちしております。



ふくい自治研、フードロス対策チーム 「お弁当のロスゼロ」2nd シーズン、始動！

島根から福井へ

2024年、島根で開催された「第40回 地方自治研究全国集会（しまね自治研）」において、「自治研フードロス対策チーム」が中心となり、初めて自治研集会でお弁当のロスゼロをめざす取り組みが行われました。集会当日は参加者全員の協力のもと、見事フードロスゼロを達成することができました。この取り組みは、連合・教育文化協会共催、第22回「私の提言」において、「ILEC 30周年記念・組合特別賞」を受賞しました。

あれから2年。今年10月に開催される「ふくい自治研」に向け、フードロス対策チーム2ndシーズンが始動しました。今回は、しまね自治研での経験を継承しつつ、新たなメンバーを迎えて体制をさらに強化。再び「お弁当のロスゼロ」という高い壁に挑みます。

今回のテーマは「食べ残しは命の無駄遣い」。このスローガンのもと、ふくい自治研に参加するすべての仲間とともに、フードロス削減への機運を高めていきます。さらに、「もったいナイトくん」というイメージキャラクターも活用し、取り組みを広く発信していきます。

2,000人の「お弁当問題」に挑む

ふくい自治研においても、全国から約2,000人規模の参加が見込まれています。これほどの大規模集会において避けて通れないのが、直前キャンセルなどに伴うお弁当の余剰問題です。

仕事の急用や家庭の事情、交通機関のトラブルなどにより、直前で参加できなくなるケースは避けられません。しかし、「仕方がない」で済ませてしまえば、食べられるはずだったお弁当が廃棄されてしまう現実を変えることはできません。

そこで今回も、余ったお弁当を食べてくれるボランティアの募集を検討しています。廃棄されるはずだったお弁当を、必要とする人に美味しく食べてもらう。この「レスキュー」の輪を広げることで、物理的なロスの削減だけでなく、「余ったお弁当はみんなで美味しく食べる」という意識づくりにもつなげていきます。現在、具体的な運用方法について検討を進めているところです。

現場で実践する

私たち自治研の現場では、これまでも食品ロスの問題に真摯に取り組んできま

した。この間、自治研に寄せられたレポートの中にも、処分せざるを得ない食品や家庭に眠っている食品を集めるフードバンクの活動、子ども食堂との連携など、各地での地道な取り組みが蓄積されています。また、学校給食の現場では、「残食（食べ残し）」の課題に向き合った活動や、突然の学級閉鎖などによって生じた給食食材を有効活用した事例もあります。

ふくい自治研での「お弁当のロスゼロ」の取り組みは、これらの運動を一步先へ進める“実践共有の場”です。余ったお弁当の廃棄に悩む集会主催者は、全国に数多く存在します。まずは自治研という象徴的な場において、「仕組み」で解決できることを示していきます。

「ふくい自治研」に参加される皆さまには、お弁当のロスを発生させない意識を持ってご注文いただくよう、ご協力をお願いします。

自治労の枠を超え、全国へ

私たちフードロス対策チームの最終目標は、「フードロスを生み出さない」という価値観を、自治研の枠を超えて広げていくことです。

規模の大小を問わず、全国で開催されるあらゆる会議や集会において、お弁当のロス対策が当たり前となる社会をめざします。

福井の地で、再び「お弁当のロスゼロ」を達成する喜びを、皆さんと分かち合えることを楽しみにしています。参加者の皆さまとともに、どのような未来が実現できるのか、今から楽しみにしています。

*「私の提言」においてILEC30周年記念・組合特別賞を受賞した「『食べ残しのない集会』への挑戦—しまね自治研におけるフードロス対策の実践と意義—」全文はこちらからご覧いただけます。



弁当頼むんだば、
ちゃんと食ってけれな！

「もったいナイトくん」
世の中からフードロスをなくすために立ち上がった騎士。食べ物の廃棄をみかけると「いたまし…」と嘆きながら、フードロスが生まれない仕組みを考え抜く。秋田県出身。好きな食べ物はラーメン。

レポート・論文を書いてふくい自治研に行こう！ 「第18回地方自治研究賞」募集要項

地方自治研究全国集会（自治研集会）では、自治体行政や地域政策に関する実践活動のレポートや研究論文を広く募集し、議論を深めるための資料として活用してきました。

2000年に開催された山形自治研以降、自治研ホームページで公開されている作品は2700本に上ります。職場や地域から発せられた問題提起や改善に向けた取り組みは、実践知・現場知としてだけでなく、公共サービスの現場の変遷を読み取ることができる貴重な資料となっています。

ふくい自治研においても、レポート・論文を募集し、「第18回地方自治研究賞」の選考対象とします。今回から、既存の自治研活動部門、自治研究論文部門に加え、新たに「自治研デビュー部門」を新設しました。自治研への入口をさらに広げていきますので、積極的なご応募をお待ちしています。

過去の地方自治研究賞・受賞作品はこちらでご覧いただけます。

https://www.jichiro.gr.jp/jichiken_kako/report/jichikensyo/index.htm

地方自治研究賞の成り立ち

故栗山益夫元自治労委員長のご遺族からの寄付金を契機として、自治労本部ならびに関係団体からの寄付金を加え基金を創設することが、1989年に開催された函館自治研で発表されました。この決定を受け、1991年の三重自治研において第1回地方自治研究賞がはじまり、今日の自治研集会まで表彰が続いています。

2024年には、さらなる自治研活動の発展を期して元・自治研助言者から寄付金を賜りました。これを受け、ふくい自治研を契機に「デビュー部門」を新設することを自治研中央推進委員会にて決定しました。



第17回地方自治研究賞・授賞式の模様

「第18回地方自治研究賞」募集要項

1. 選考と入賞者発表

自治研活動部門、自治研究論文部門は、自治研中央推進委員長ほか、有識者で構成する「第18回地方自治研究賞選考委員会」にて選考します。

デビュー部門は自治研中央推進委員が選考にあたります。入賞者の発表は9月を予定しています。

＜募集にあたってのポイント＞

- ・各部門の優秀賞はふくい自治研・全体会にて表彰し発表
- ・応募作品は自治研ホームページに掲載
- ・発表を希望する方はポスターセッション（集会2日目）に参加が可能
- ・はじめてレポートを応募する方は「自治研デビュー部門」で集会参加を助成

2. 表彰

①自治研活動部門

優秀賞 1 副賞 20万円

奨励賞 若干 副賞 5万円

②自治研究論文部門

優秀賞 1 副賞 10万円

奨励賞 若干 副賞 5万円

③【新設】自治研デビュー部門

ネクストフューチャー賞 若干 副賞 3万円

ホープフル賞 各県1 副賞 3万円

（但し、自治研全国集会への参加助成として）

3. テーマ・応募資格

(1) テーマについて

自治体行政への政策提言または実践経験、市民参画による政策実現や公共サービス事業運営の試み、コミュニティづくりの実践や市民ワークショップなど、自治に関わるさまざまなテーマのレポート・論文を募集します。

(2) 応募資格

どなたでも応募いただけます。共同での執筆によるご応募も歓迎します。

4. 形式

(1) レポート【選考対象：自治研活動部門・自治研デビュー部門】

- ・パワーポイント等を使用したスライド形式での応募も可
- ・字数はテキスト形式 6,000 字程度、スライド形式は 20 枚以内

(2) 論文【選考対象：自治研論文部門】

- ・字数は、8,000 字程度とし、資料含めて上限は 1 万字以内

5. 応募方法と締め切り

応募締め切り：2026 年 7 月 3 日（金）

提出方法：データでのご送付に限ります

- ①自治労県本部からご提出いただく場合
ご所属の県本部にお問い合わせください
- ②県本部以外からご提出いただく場合
メールにてご送付ください

自治労本部・総合政治政策局 自治研事務局

メールアドレス：jichiken-report@jichiro.gr.jp

6. 参考資料

①募集要項

ご応募の際は、既定の「レポート・論文等報告用紙」を使用してください。自治研ホームページからダウンロード可能です。

https://www.jichiro.gr.jp/jichiken/topics/2026/02/20260220_bosyuu.html

②第 18 回自治研賞についての FAQ

<https://chatgpt.com/g/g-6983377564748191a611c0451df8cd59-hukuizi-zhi-yan-zi-zhi-yan-shang-faq-bban>



③過去のレポート・論文の横断検索（2000 年～ 2024 年までの約 2700 本を収録）

<https://chatgpt.com/g/g-6944da21fefc8191b7123229a7ba31a9-zi-zhi-yan-rehotolun-wen-jian-suo-gpt>



本ツール（FAQ、横断検索）は情報整理の補助を目的とした生成 AI であり、回答には不正確な情報（ハルシネーション）が含まれる可能性があります。最終的な確認は、必ず原典にてご確認ください。

申し込み方法

◎参加方法

自治労組合員の方は所属する組合を通じてお申し込みください。

一般の方は、自治研ホームページよりお申し込みください。

<https://www.jichiro.gr.jp/jichiken/>

申込開始は 6 月下旬を予定しております。

◎参加費

集会参加費は、10,000 円（会場費、資料代）です。

また、下記の分科会に参加される方は、別途参加費（貸切バス・入館料・昼食代）がかかります。

【第 6 分科会「平和」～あたりまえの日常は、平和な社会であり続けることから】

開催地：敦賀市（現地集合・現地解散）

参加費：3,500 円 分科会の詳細については③ページをご覧ください。

【エクスカージョン】

参加費：4,500 円（コース共通） 詳細については⑩ページをご覧ください。

◎昼食代 集会中（1 日目・2 日目）はお弁当をご用意いたします。ご希望される場合は別途弁当代（1,200 円・税込）を頂戴いたします。

◎宿泊 宿泊の斡旋は自治労旅行センターでも承ります。

●開催にあたって

◎フードロスのない集会運営にご協力ください

ふくい自治研では、フードロスを生み出さない集会運営に取り組みます。集会の参加にあたっては「お弁当を注文したら食べる」の意識の共有をお願いします。「自治研フードロス対策チーム」の取り組みは⑭ページをご参照ください。

◎ふくい自治研はお子様と一緒に参加いただけます

ふくい自治研は全日程を通して、お子様連れでご参加いただけます。集会開催期間中は託児施設にてお子様をお預かりすることが可能ですので、ご希望の方はお申し込み時にお子様の情報をご登録ください。

◎ペーパーレス化を推進します

環境負荷の低減をはかるため、ふくい自治研では集会資料のペーパーレス化を追求します。集会資料はデータでの共有を基本としますので、皆様のご理解ご協力をお願いします。

〈お問い合わせ先〉

第 41 回地方自治研究全国集会・ふくい自治研実行委員会（自治労福井県本部）

TEL：0776-57-5800

自治労本部・総合政治政策局（自治研担当）

TEL：03-3263-0274

会場周辺地図



〈アクセス〉
 ・徒歩
 福井駅→メイン会場 約25分
 ・えちぜん鉄道/福井鉄道
 福井駅⇄田原町駅 約10分
 ・バス 約7分

フェニックスプラザ
 (メイン会場)
 (分科会会場)

福井県教育センター
 (分科会会場)

福井県国際交流会館
 (分科会会場)

福井県庁

福井県民ホール
 地域交流プラザ
 (分科会会場)

ハピリンホール・ハビテラス
 (エキシビジョン、組合フェス会場)

福井駅

福井織協ビル
 (分科会会場)

次号 月刊自治研 6月号のお知らせ 2026年6月5日発行予定

特集 ● 子ども支援の持続可能性を問う

少子化が進む中、虐待、不登校、発達の違い、貧困、孤立など、子どもをめぐる課題は複雑化・重層化している。困難を抱える子どもと家庭を支える輪が広がっているが、その多くは善意と献身に支えられており、担い手自身の疲弊や不安定さが課題となっている。子ども支援の現場の課題を起点に、善意に依存しない支援体制のあり方と自治体が果たすべき役割を探索。

- インタビュー 子ども支援の担い手が直面する課題 子ども支援における自治体の役割
 岩田美香・法政大学現代福祉学部教授
 - 論文 スクールソーシャルワーカーの実態と自治体支援の工夫
 奥村賢一・福岡県立大学人間社会学部准教授
 - 報告 現場から考える子どもでも通園制度と持続可能性
 池下孝弘・自治労社会福祉評議会保育部会幹事/津市保育士
 - 報告 子ども家庭センターで働く家庭児童相談員の役割と実態
 千代達司・社福評児童相談養育部会幹事/美里町統括支援員
 - 報告 地域における子ども支援の現場から―西東京市―相馬明美 西東京自治研センター
 フリースクールを「善意」だけに頼らないために
 - 報告 木村清美・NPO法人フリースクール全国ネットワーク代表理事
- (執筆者、タイトルなどについては変更になる場合があります)

編集部から
 ●記念すべき八〇〇号を皆さまのお手元にお届けすることができました。今号は「ふくい自治研」開催要項を盛り込んだ特別編集号として、全国の仲間が福井で出会い、実践を共有する場への準備にお役立ていただければと思います。

また、八〇〇号記念プレゼント企画も実施中です。ぜひ奮ってご応募ください。

八〇〇号は、読者の皆さまと編集部がともに築き上げてきた歩みそのものです。この節目を新たなスタートとして、次の九〇〇号にむけてさらに充実した誌面づくりに取り組んでまいります。引き続きのご愛読をよろしくお願いいたします。

(卯)

月刊自治研 2026年5月号
 第68巻800号

発行●2026年5月5日

編集●自治研中央推進委員会
 TEL:03-3263-0274

発行所・発売元●
 株式会社 自治労サービス
 〒102-0085
 千代田区六番町1自治労会館6階
 TEL:03-3263-2023

制作●アトリエ・レクラム

印刷●株広報プレス

定価●838円(本体762円+税10%)
 年間定期購読料●
 8,976円(本体8,160円+税10%)